

日本の教育プログラムを視察

叡啓大学

叡啓大学（広島市）は、社会を前向きに変えるチェンジ・メーカーを育てる「22世紀型大学」として100年先の未来予想図をデザインできるよう、社会を変える「実践力」と世界で通じる「教養力」を培う教育を行っている。

同大では5月24日、日本の先端的な教育プログラムや教

育効果・成果を直接視察し、深い洞察を得ることを目的

に、ブラジル・サンパウロ州高等教育機関運営団体組合（SEMESP）のRodrigo Capelato事務局長、ESPM大学のAlexandre Uehara教授をはじめとする約40人の関係者が訪れた。訪問団一行は、5月20日から27日までの

期間で日本の大学を訪問。広島県内の大学では、同大が訪問先となった。

当日は始めに、同大の有信睦弘学長とSEMESPの事務局長であるCapelato氏の挨拶が行われた。SEMESPは平成21年より海外での視察を行っているのだという。Capelato氏は、「今回の訪問では、日本の教育システムのベストプラクティスを学び、ブラジルの高等教育における課題解決に役立てたい」と述べた。

その後、同大ソーシャルシステムデザイン学部長の保井俊之教授から、ポルトガル語で同大の概要や教育活動について解説。質疑応答では、男女比や留学生の数、課題解決演習やリベラルアーツについて多くの質問が寄せられた。

また、訪問団は同大学生3人によるガイドで学内の施設や寮を見学。その後、3年生の必修科目である「課題解決演習Ⅱ」の授業を視察した。川瀬真紀教授が授業についてこの概要を説明し、訪問団からは「企業とどのぐらいの頻度で連携して学ぶのか」といった具体的な質問が投げかけられた。それに対し、学生は積極的に英語で回答している様子が見受けられた。

Capelato氏は今回の訪問を通して、「ブラジルと日本の大学教育には大きな違いがあります。ブラジルでは、多くの若者が大学で学ぶ機会を得られず、18歳から24歳の若者の大学進学率はわずか20%です。ブラジルでは、学生のエンゲージメントを高めることや、大学で学びたいという意欲を育てることは非常に難しい課題です。さらに、ブラジルの大学の多くは私立であり、経済的な理由で学費を払えずに中途退学する学生も多くなります」と、ブラジルと日本における大学教育や若者の意識の違いについて述べた。

続けて、「叡啓大学では、デジタル社会に対応できる力を身につけられるカリキュラムが組まれていることに非常に革新性を感じました。将来的に必要とされる人々を育てるためにも、学生がここで学ぶことの重要性を強く感じました」と、同大の教育体制に対してコメント。

叡啓大では、新しい教育システムを広めるためにも、今後も日本のみならず世界からの視察訪問を受け入れていくという。



訪問団と英語でコミュニケーションを取る学生



国内・外の高等教育について考える貴重な機会となった